

先週から使徒言行録に聞き始めました

弟子たちは主イエスが天に昇って行かれた後、悲しみ、戸惑い、不安を覚えながらも、キリストが最後に語ってくださった言葉に、踏みとどまっていた。

それは、「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」という主イエス・キリストの言葉です。

驚いた。復活の主であるキリストが天に昇り地上にはいなくなる。だがそれで、イエス・キリストと自分たちの物語は終わりなのではない。聖霊が与えられ、自分たちはそれによって力を受けて、地の果てまで、キリストの復活の証人になっていく、次の物語が始まるのだ、と言われたからです。

弟子たちは、エルサレム近くに集まり、女性の弟子たち、そのほか多くの弟子たちと共に、心を合わせて祈っていたのです。

祈るということは、主の祈りで学んだように、天を仰ぐことです。自分たちの思いではなく、神の働き、神の恵みをまず仰ぐことです。弟子たちは、まさに主イエスが地上にはいないという不安や戸惑いの中で、主イエスが約束された聖霊の働きを仰ぎ、祈ったのです。それが教会の始まりの物語です。

ペトロが立ち上がって、演説を始めました。

ペトロは二つのことを皆に言います。一つは、ユダのことです。主イエスを裏切り、それによって得た報酬で土地を買い、そこに落ちて体が真ん中から裂け、死んでしまったということ。もう一つは、だから欠員が生じた十二人の一人を選任しよう、ということです。

今ここに集まって祈っている120人ほどの人というのは、イエス・キリストの弟子、つまりやがて生まれるキリスト教会の礎を担っていく人たちです。その人たちの前で、ペトロはなぜユダのことを語ったのでしょうか。確かに、ユダが12人から抜け、しかも死んでしまったので、欠員が生じたということを使うためでした。12人という数字はとてつもなく彼らにとって大事な数字でした。しかしそれにしても、あまりに悲惨な死の報告です。マタイによる福音書によれば、ユダは首をつって死んだ、と報告されており、土地を買ったのはユダ自

身ではなく、祭司長たちだった、と使徒言行録とは違う報告がされています。ユダの死、ユダの最後をめぐって、いろいろな情報があったということでしょう。しかし、いずれにせよ、ユダの死が悲惨な最期だったことは、わかるのです。ペトロはなぜ、今ここでユダの悲惨な死を語ったのでしょうか。

ペトロはユダのことを、わたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられた者だった、と言っています。仲間であり、同じ任務を担った同志、それがユダでした。どうでもいい人間などではない。だがユダは、自分からキリストを裏切っていました。どうしてもなくキリストから離れていきました。殺されることを感じながら、キリストを売ってしまったのです。それは共に歩んできた仲間であるペトロにとっても痛恨の出来事だった。そしてあろうことか、ユダのことを語るペトロも、土壇場でキリストのことを知らないといって裏切ったのです。

ユダは脱落者であり、不信仰者であり、ダメな奴、と上から目線で語ることはペトロにはできない。ペトロは、自分の裏切りも自覚していたでしょう。だからペトロの中にはユダに対してさまざまな思いがあったでしょう。しかし、ペトロはここで個人的な感想を語りたかったのではない。ユダは自ら命を絶ち、ペトロは使徒として歩み始めた。ペトロとユダの違いは何なのか。わたしたちはそのことを受けとめておかななくてはならない。

それは、ペトロをはじめ、ほかの弟子たちは復活の主イエス・キリストに出会った、ということ。これだけです。弟子たちは皆、何らかの形で主イエスを裏切った。にもかかわらず復活した主イエス・キリストは、弟子たちに出会い、弟子たちを受け入れ、共に歩んでくださった。甦りの主として彼ら彼女たちに出会ってくださった。ユダは自分の罪の重さに押しつぶされ、自分の罪を自分でどうしようもできないことに絶望したのかもしれない。自分で自分を回復させることができなかった。それは、ユダに限らない、ペトロもそうだし、わたしもそうだし、皆さもそうなのです。自分で自分の罪の問題を解決できるものなんていない。もし復活のキリストがわたしと出会ってくださらなかつたら、わたしは自分の罪の重さに押しつぶされていく。

ペトロを代表とする他の11人は、復活された主イエスとの出会いを与えられ、主イエスによってもう一度弟子として、主イエスを信じる者として立てられたのです。主イエス・キリストの十字架の死と復活による罪の赦しの恵みの中に置かれたのです。このことが、ユダと彼らとの唯一の違いです。ペトロは

その自覚に立ち始めていた。だからペトロはユダのことを語れたのではないか。この自分も、ほかのすべての弟子たちも、復活の主イエスの恵みがなければ、ユダと同じように滅びるしかない者たちだったのだ、ということです。そのようなものとして今わたしたちはここに立たされているのだ、ということです。そして、だからこそ、ユダについては、そのすべてを神に委ねる以外にない、ペトロはそう受けとめていたのではないか。

さて、ペトロはここで11人に、1人加わってもらうことを提案します。ここで注目したいのは、12弟子と呼ばずに、使徒と呼んでいることです。

これまで、福音書では弟子と呼ばれていた者たちが、今ここで「使徒」と呼ばれている。弟子とは先生から教えを受け、修行に努める人、門下、門下生、という一般的な呼称です。しかし使徒とは特別な呼称です。単なる弟子ではない。

ペトロはここで使徒のことをこう語るのです。「主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼の時から始めて、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中から誰か一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」

ペトロが言うのは、使徒とは、主イエスの地上の生涯の同伴者。主の公の活動を開始したときから最後、昇天するまでをご一緒し、目撃した人。それが使徒として立てられる条件だということです。

そして使徒として最も大事なことは、主イエスの復活の証人である、ということです。使徒は、地上の主イエスと同伴し、十字架への歩みを目撃し、十字架を見つめ、昇天を見届けた者、そして復活の主と出会いを与えられ、罪に死に、新しいいのちに生きる者とされた者、そのものが主の復活の証人にふさわしい、ということです。そう提案して、弟子たちの受けいれるところなり、二人のものが候補者として立てられ、主に祈りをささげ、くじを引き、マティアが選任されたのです。ここで12人からなる使徒がたてられました。12弟子は、12使徒に格上げされ、指導者として権威づけられた、ということでしょうか。そうではないと思います。教会が生まれようとするときこの人たちはたんに弟子なのではない。自分たちが生かされ、それを語り伝え宣べ伝えていく、福音というものから離れない、福音の中で生き、福音に生かされ、福音を宣べ伝えていく、福音から遣わされていく、弟子たちはそのようなものたちを使徒と呼び、立てたのです。

使徒と呼ばれる人は、ここで選ばれた12人の他は、パウロだけが使徒と呼ばれました。そしてこの人たちがなくなった後は、使徒と呼ばれる人は立てられませんでした。世代が交代し、主イエスの歩みに同伴した第1世代の人が地上からいなくなったからかもしれません。しかし、教会の根本には、この使徒の使命と役割が据えられ継承され続けてきました。使徒信条と並ぶ教会が大切にしているニケア信条という告白の中に、「我らは、一つであって聖なる公同の使徒的教会を信ず」という告白があります。わたしたちは使徒的教会を信じているのです。

イエス・キリストの地上の歩み、十字架へ向かうすべての道、そして死と復活。わたしたちを生かし、救うのは、この福音である。この福音から離れない。この福音を高く掲げ、証しし、宣べ伝えていく。この福音の権威に服従し、この福音からわたしたちを引き離そうとするものがあれば、抵抗し戦う。

それが使徒的、ということです。

教会が今まさに生まれていこうとするとき、使徒が立てられたということは、この群れの礎はキリストの福音なのだということ、これ以外にこの群れを立てるものはないのだ、ということ、120人の弟子たちが受け取り始めていたということです。教会の歩みも、そして教会に連なるわたしたち一人一人の歩みも、イエス・キリストの復活の福音によって根本から支えられ、導かれ、活かされているのだ、ということ、今日また新たに受けとめていきましょう。